

広島女学院大学大学院言語文化研究科日本言語文化専攻

2021 年度修士学位論文

日本語学習者の語彙習得  
—文体的意味の習得の観点から—

G20111 王 一涵

日本語文化

指導教員：渡邊 ゆかり

2022 年 3 月

# 目次

第1章	はじめに	1
第2章	先行研究	3
2.1	文体の分類	3
2.2	日本語学習者への指導上の課題	4
第3章	研究方法	6
3.1	本研究における文体的意味の定義	6
3.2	調査1の概要	7
3.3	調査2の概要	7
3.4	調査3の概要	8
第4章	調査1の結果	13
第5章	調査2の結果	15
第6章	調査3の結果	17
6.1	回答者の基本情報	17
6.2	意識調査の回答結果	18
6.3	文体テストの結果	23
6.3.1	問題1	23
6.3.2	問題2	25
6.3.3	問題3	30
6.3.4	問題4	33
第7章	考察	37
7.1	レポートや論文で間違いやすい語	37
7.2	レポートや論文に適した語の選択に対する意識	39
7.3	どのような方法で文体的意味を獲得しようとしているか	40
7.4	文体的意味の理解度に影響を及ぼす要因	40
7.5	文体に合わせた語の選択能力を上げるために必要なこと	42
第8章	終わりに	43
参考文献		46
参考 web サイト		47

## 第1章 はじめに

多くの日本語学習者にとって知的意味は同じであるが、文体的意味が異なる語を適切に使い分けることは容易なことではない。語の習得は知的意味を理解することに留まらない。使用場面や文脈の違いを考慮し、適切な語を選べるようになることも不可欠である。例えば、文末表現の「です」と「である」、第一人称の「ぼく」と「わたし」などの使い分けが挙げられる。

話し言葉においては場面や聞き手と話し手との関係を考慮して適切な語を選択することが求められるが、書き言葉においても同様のことが求められる。読み手と書き手との関係や文章を書く目的や文章のジャンルにより、使用する語が異なる。例えば、通常、お礼の手紙を書く際にはしばしば丁寧体を使用するが、レポートを書く際には丁寧体は使用しない。語には丁寧体の語と普通体の語が存在するが、この他にも語種の違いにより、文体的意味が異なる語も存在する。例えば、漢語の「米飯」と和語の「めし」と外来語の「ライス」である。これらは、知的意味はほぼ同じであるが文体的意味が異なる。

日本語母語話者であれば無意識にこれらを使い分けることができる。しかし、日本語が第一言語ではない日本語学習者にとっては、このような語の使い分けはその基準が不明瞭であり、適切に選択することが困難である。特に、日本の大学で学ぶ外国人留学生にとっては、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けることが要求される。しかしながら、様々な要因により、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けることは容易ではない。

そこで、本研究では、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けられるようになるためには、何が必要とされるのかを具体化することを目的とし、以下のリサーチエスチョンを設定する。

1. 日本の大学や大学院で学ぶ留学生が文体的意味の習得の観点からレポートや論文中で間違いやすいのはどのような語か。日本の大学や大学院で学ぶ留学生は、レポートや論文に適した語の選択に関してどの程度意識しているか。
2. 日頃からレポートや論文に適した語の選択をこころがけている学習者は、特にどのような方法でその知識を得ようとしているのか。
3. 文体的意味の理解度が高い学習者と文体的意味の理解度が低い学習者の相違には、どのような要因が関係しているのか。

本研究では、これらのリサーチクエスチョンを明らかにするにあたり、まず予備調査として、本学の図書館にある留学生向けに書かれた文章の書き方についてのテキストの中から文体に関して留学生が間違いやすい語を抜き出す。また、「日本語学習者作文コーパス」<sup>1</sup>中に見られる文体的意味とかかわる誤用を抽出し、誤用の傾向を分析する。次に、1 と 2 のリサーチクエスチョンを明らかにするために、大学や大学院の日本語学習者にアンケート調査を行う。アンケート調査の内容はレポートや論文に適した語の判断と文体的意味を理解するためにどのような方法で学習してきたのかの二つの側面から考える。最後に、このアンケート調査の結果に基づいて、リサーチクエスチョン 3 を明らかにする。

---

<sup>1</sup> 「日本語学習者コーパス」は次の web サイトから利用できる。詳細は第 3 章 3.3 で述べる。

<http://sakubun.jpn.org>

## 第2章 先行研究

### 2.1 文体の分類

日本語の文体に関する先行研究は少なくない。文体の分類についても先行研究によって様々である。その中で国語学会編『国語学大辞典』(p.766)では、日本語の文体を「個性的文体」と「類型的文体」の二つに大別している。ここでいう「個性的文体」とはある表現の特殊性が、他に類を見ない、それ自体独自のものとして認識される場合を指す。また、「類型的文体」については「記載形式」、「語彙・語法」、「修辞上」、「文章のジャンルの上」の4つに分けている<sup>2</sup>。

この『国語学大辞典』の分類に対し、魏(2001)は、日本語教育のための文体分類及び文体指導の観点から、範囲が広すぎて、分類の基準も一致していないと指摘した。また、『国語学大辞典』に示されている「類型文体」を、「漢文体」「敬体」などの言葉の用い方の特徴による「言語文体」と、「手紙の文体」「科学技術文の文体」などの社会交際機能の相違による「ジャンル文体」の二つに分類した。さらに、魏は、これらに「個人文体」を加えた。魏はこれら三つの「文体」の相互関係について、「言語文体」を研究するときには、「ジャンル文体」に触れなければならない、「ジャンル文体」を研究する時には、「個人文体」を問題にしなければならないとしている。

一方、宮島(1997)はコミュニケーションの改まり度の観点から語の文体を「俗語」「日常語」「文章語」の三つに分類した。宮島はこれらを以下のように定義している。

俗語：書き言葉には現れず、もっぱら、砕けた、下品な話し言葉で使われるものである。

日常語：積極的な文体の特徴を持たず、どのような種類の話し言葉、書き言葉にも自由に使われる中心的な層である。

文章語：もっぱら書き言葉や、改まった話し言葉だけに使われるものである。

また、宮島はこれらの中でも程度の差が認められるとした。例として日常語についていえば、完全に無色透明なものほかに文章語に近い「改まった日常語」と、

---

<sup>2</sup> 『国語学大辞典』では、これらの具体例として、以下のようなものを挙げている。

記載形式：漢文体・宣命体・東鑑体(変体漢文)・漢字仮名交り文体、など。

語彙・語法：和文体・漢文訓読体(漢文直訳体)・和漢混交体・候文体・擬古文文体(雅文体)、など。

修辞上：散文体・韻文体・四六駢儷体、など。

文章のジャンル：日記文体・書簡文体、など。

俗語に近い「くだけた日常語」とがあるとしている。具体例は以下のとおりである。

わたくしーわたしーあたし  
どちらーどれーどっち  
すがたーかたちーかっこう

左の「わたくし」「どちら」「すがた」は文章語に近い改まった日常語に相当する。中央にある「わたし」「どれ」「かたち」は無色透明な日常語に相当する。右の「あたし」「どっち」「かっこう」は俗語に近いくだけた日常語に相当する。

## 2.2 日本語学習者への指導上の課題

2.1 では宮島を紹介したが、宮島が示したように、文体は改まり度の観点から段階的にとらえることができる。井上（2009）も論説文における語の文体の適切性を考えるに際し、どの段階から論説文の語の文体として適切なのかという問題が生じるとしている。また、文体の適切性を判断するためには、意味の近い語の間における文体の差を知り、用いようとする語を相対的に位置づける必要があるとしている。しかし、そのうえで初級から中級の留学生が論説文で用いる語については文体の細かな段階差よりも論説文に用いることが適切か否かの境界の明確化のほうが喫緊の問題であると述べた。また、論説文の文体としての適切性を判断する際には宮島の分類における「日常語」と「俗語」、ならびに「くだけた日常語」と「無色透明な日常語」の境界に留意すべきであると指摘した。しかしながら、これらの判断基準には個人差と曖昧さがある。

高野（2011）は、大学で学んでいる留学生が「レポート・論文」において特定の語がふさわしいかどうかを認識できるかを調べた。調査対象者は、外国人日本語学習者グループ（NNS）と日本人母語話者のグループ（NS）である。中級後半レベルの読解教材「短眠と長眠」という文章中の表現 10 ケ所を意図的にふさわしくない表現に変え、調査対象者に「レポート・論文にふさわしくない表現に下線をひき、ふさわしい表現に直す」という指示をした。

その結果、NNS の群では、「⑥量だけじゃなく、」のような縮約形、「⑦あんまり」のようなモーラ付加形、「⑩いいでしょう。」のような文末表現の認識度（適切に修正した割合）が高いことが明らかとなった。高野は、これらは音の変化と文末なので、注目しやすいと推測している。

一方、「④さめてて、」の認識度は 50.7%と約半数しかなかった。高野は、この「い」の脱落は「語形の変化形：モーラの脱落形」にあたり、これは学習者が「発表」する際にも最後まで誤用が残ってしまう表現であるとしている。

また、「①ナポレオンとか」の「～とか」の認識度も、47.8%と低かったとしている。高野は、この原因について、これが発表中に NNS 学習者がよく用いる表現

であるため、レポートや論文でも使っていていいというような認識になりやすいのかもしれないとしている。

このほか高野は、最も注目すべき点として、「②どんな違いが→どのような違い」の項目が NNS、NS とともに 35.0%と認識度が最も低かったことを挙げている。高野は、この点について、実際に添削を行う日本語教師もチェックを見逃している可能性もあり、許容してもよい範囲と言えるかもしれないと述べている。

以上、本章では、本研究と関わる主な先行研究について取り上げた。特に日本語学習者への指導と関わる研究においては、レポートや論文においてふさわしい表現を認識できるかという点に焦点が置かれている。

本研究においては、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けられるようになるためには、何が必要とされるのかを具体化することを目的とする。研究の焦点は主に「レポート、論文」で使用する語であるが、他の文章と比較するために、その他の種類の文章で使用する語についても調査する必要もある。したがって、本研究では「レポート、論文」における語のふさわしさだけでなく、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が書かなければならない「E メール」「奨学金申請書」「エントリーシート」などの文章における語のふさわしさについても着目する。

## 第3章 研究方法

ここでは本研究の方法について述べる。まず、3.1 で本研究における文体的意味の定義を示す。次に、3.2-3.4 では、本研究で行った3つの調査の概要について述べる。

### 3.1 本研究における文体的意味の定義

Reech (1974 : 23) は、語の意味を以下の7つに分類した。

- ① 概念的意味(Conceptual meaning or sense)
- ② 内容的意味(Connotative meaning)
- ③ 文体的意味(Social meaning)
- ④ 感情的意味(Affective meaning)
- ⑤ 反映の意味(Reflected meaning)
- ⑥ 連語的意味(Collocative meaning)
- ⑦ 主題的意味(Thematic meaning)

このうち、文体的意味については、以下のように説明している。

SOCIAL MEANING is that which a piece of language conveys about the social circumstances of its use. (p.14)

(文体的意味は言語使用の社会的環境について伝達されるものである。)

本研究においても「文体的意味」という用語を、語の意味のうち社会的な環境について伝達されるものとする。

國廣(1982 : 82) は、この文体的意味を文体的特徴と呼び、「語体的特徴」と「(狭義の) 文体的特徴」に分類している。このうち前者については、「文語体」「口語体」といった種類の文体差を指すとしている。一方、後者については、「時間的な『廃語、古語、新語』の別、地理的な各地の方言臭、使用者の特徴に基づく年齢差、性別、職業別、使用場面に基づく『固苦しい、くだけた』とか『学識語』、社会的機能に基づく『丁寧語、敬語、悪態語』などの別が考えられる (pp. 82-83)」としている。

また、『新版 日本語教育辞典』では、文体的意味について日本語の具体例をあげ、次のように記述している。

ははうえ・おかあさま・おかあさん・かあさん・かあちゃん・おっかあ・おふ



くろ・ママ

これらの語の違いは語感や位相、古語か新語か、文章語的か俗語的かなどの違いによって生じるものである。このようなものを文体的意味という。(p. 306)

このように、一口に文体的意味といっても様々な種類が存在するが、本研究では、特に、文章の種類の違いに着目する。

『新版 日本語教育辞典』では、文体的意味について日本語教育的観点から次のような指摘がなされている。

文体的意味のような、語の中心の意味を取り巻く周辺の意味を学ぶことも意味の学習においては重要である。(p. 306)

稿者も、日本語学習者の一人として、中心の意味だけでなく、文体的意味の相違を理解し、文体的に適切な表現を使用することは、日本語母語話者と文書を通してのコミュニケーションを行う上で重要なことと認識している。以下、日本語学習者の文体的意味の習得に関する本研究の調査の概要を述べる。

### 3.2 調査1の概要

本研究では予備調査として、本学の図書館にある留学生向けに書かれた文章の書き方についてのテキストの中から文体に関して留学生が間違いやすい語を抜き出した。これらの語は留学生を対象にした文体的意味に関する理解度テストを作成する際に参考にした。参考にしたテキストは以下の通りである。

- ① 『改訂版 大学・大学院留学生の日本語 ④論文作成編』2015, アルク
- ② 『留学生のためのここが大切文章表現のルール』2009, スリーエーネットワーク
- ③ 『大学生と留学生のための論文ワークブック』1997, くろしお出版
- ④ 『留学生のための論理的な文章の書き方』2000, スリーエーネットワーク

### 3.3 調査2の概要

調査2では「日本語学習者作文コーパス」を利用し、「日本語学習者作文コーパス」中の文体的な誤用を抽出した。本コーパスは、日本語学習者の作文データをコーパス化したものである。初級から上級の日本語学習者 304 名の作文データが収録されている（語数の合計は 113,554 語）。作文のテーマは、「外国語が上手になる方法について」（192 名分）と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」（112 名分）である。以下の URL の web サイトから利用できる。

<http://sakubun.jpn.org>

本調査期間は 2021 年 6 月 1 日～6 月 10 日である。本調査の結果も留学生を対象にした文体的意味に関する理解度テストを作成する際に参考にした。

### 3.4 調査 3 の概要

調査 3 では、調査 1 と調査 2 に基づいて、日本に滞在する JLPT（日本語能力試験）の N2、N1 に合格している日本語学習者に対して文体的意味の理解度に関するテストを行った。調査対象とした日本語学習者は日本の大学や大学院に在学する留学生である。中国人の留学生 23 名、ベトナム人の留学生 1 名であり、アンケートの実施期間は 2021 年 7 月 27 日～8 月 30 日である。

また、アンケートでは、協力者の真の実力を測るために、回答するときにネットや辞書などを使わないようお願いした。アンケートの質問はリサーチクエスション 1 と 2 を明らかにすることを目的として作成した。内容は以下の二つの側面から考えた。

1. レポート・論文や E メールなどの文章に適した語を選択できるかどうか。
2. 文体的意味を理解するためにどのような方法で学習してきたのか。

まず、1 の目的と関係する質問調査の内容は以下の通りである。

問題 1 次の下線をつけた語は、レポートや論文ではどう書きますか。下の選択肢の中から一つずつ選んでください<sup>3</sup>。

- ① 高齢人口がだんだん増加してきた。
- ② 世界中でたくさんの人がインターネットを利用している。
- ③ 月の直径は地球のだいたい4 分の 1 である。
- ④ この病気の原因は、まだ解明されていない。
- ⑤ 今年度は昨年度よりもっと売りが伸びた。

A 次第に B はるかに C さらに D 多くの E およそ F わずかに  
G いまだに

問題 2 次の文は論文の中で使われている文です。(A) (B) に入る適切な表現を

---

<sup>3</sup> 問題 1 の質問項目は、以下の書籍に挙げられている練習問題を用いた。  
『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』(p. 14)

下の選択肢の中からすべて選んでください<sup>4</sup>。

(A) は「輸出が 2.5 倍になる一方、輸入は 13 倍になり、市場は大混乱を生じた」と (B)。

A: ア 森さん      イ 森 (1987)      ウ 森先生      エ 森      オ 森氏  
B: ア 述べている      イ 述べられた      ウ 述べています  
    エ 述べた              オ 述べました

問題 3    (    ) の中の英語の意味に合う日本語表現を書いてください。なお {    } の中はそれぞれの表現が使われた場面を表しています<sup>5</sup>。

- ① {先生に久しぶりに会いたいことを伝える E メール}  
来月東京へ行くことになりましたので、先生に (want to meet) と思い、ご連絡しました。
- ② {日本語教室を見学させてもらいたいことを伝える E メール}  
クラスのレベルなどがよく (do not know) ので、できれば一度、見学させていただきたいと思っています。
- ③ {講師に会の延期を伝える E メール}  
村上様に講師を (asked) 4 月 9 日の交流会の件です。
- ④ {日本語の先生に大学に合格したことを伝える E メール}  
勉強が (it was hard) ので、合格できて本当にうれしいです。
- ⑤ {商品の配送遅れについて苦情を言う E メール}  
こちらのホームページでデジタルカメラを (ordered) が、2 週間経ったのにまだ届きません。
- ⑥ {先生に奨学金の推薦状を依頼する E メール}

---

<sup>4</sup> 問題 2 の質問項目は、以下の書籍に挙げられている例文を用いた。

『大学生と留学生のための論文ワークブック』(p. 12)

<sup>5</sup> 問題 3 の質問項目は、以下の書籍及び web サイトに挙げられている例文を用いた。

- 『日本語 E メール の書き方』(p. 46、p. 48、p. 60、p. 86、p. 110、p. 120)
- 「インターンシップガイド」  
<https://internshipguide.jp/columns/view/scholarship-application-reason> 最終閲覧日 2021. 7. 19
- 「賢者の就活」<https://kenjasyukatsu.com/archives/1237> 最終閲覧日 2021. 7. 23
- 就活サイト「ONE CAREER」<https://www.onecareer.jp/articles/526> 最終閲覧日 2021. 7. 23

来年は卒論でアルバイトが (can not) ので奨学金を応募したいのですが、推薦状が必要だそうです。

⑦ {奨学金申請書}

父は会社で勤務 (works)。

⑧ {奨学金申請書}

私の兄は知的障害を持っており、常に母がサポートしています。  
(so)、父の収入だけに頼っていますが、生活費は出せても、私の学  
費までは用意できないと言われてしています。

⑨ {エントリーシートの自己PR}

私は自身が所属する大学のサークルの練習参加率が悪いことに問題意  
識を持って (had)。

⑩ {エントリーシートの志望動機}

(Your company) のマーケティングを通じて、自身のスキル向上を実  
現したいと考えています。

問題 4 次の文章を読み、例のように論文で使わない方がよい表現に下線を引き、  
論文らしい表現に直してください<sup>6</sup>。

私はこの論文で日本とアメリカの教育制度の違いについて書きますよ。  
どっちの国でも大学で何を学ぶかは、大学に入る前に何を学んだかによ  
って違うんだなあ。日本じゃ、小学校とか中学校とか高校ですごくい  
っぱい勉強するから大学での勉強はあんまり強調されない。でも、アメ  
リカでは大学に入る前にあんまり勉強をしないから、大学に入ってから  
の勉強が重要である。

例：私はこの論文で→本稿では

次に、p.8 の 2 の目的と関係する意識調査の内容は以下の通りである。

問1. 生活の中で間違った日本語を使った時、周りに指摘してくれる人がい  
ますか？

はい → 2)

いいえ → 3)

---

<sup>6</sup> 問題 4 の質問項目は、以下の書籍に挙げられている例文を用いた。

『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』(p.8)

- 問2. それはどのような人ですか？（複数回答可）
- ① 教員
  - ② 友人
  - ③ 職員
  - ④ その他
- 問3. 授業で出された課題を提出する前にもう一度見直しますか？
- はい                      いいえ
- 問4. 文体的意味という言葉を知っていますか？
- はい                      いいえ
- 問5. レポートや論文を書く際に、先生から文体に関する指導がありますか？
- はい                      いいえ
- 問6. 文章の目的や文章を読む人にふさわしい表現をどの程度意識していますか？
- ① まったく意識していない
  - ② あまり意識していない
  - ③ そこそこ意識している
  - ④ とても意識している
  - ⑤ 非常に意識している
- 問7. 文章の目的や文章を読む人にふさわしい表現についてどうやって学習していますか？（複数回答可）
- ① 日本語学校の授業で学習
  - ② 大学の授業で学習
  - ③ 友人や周りの日本人から教わる
  - ④ 独学で学ぶ
  - ⑤ その他→8 で具体的な方法を書いてください
- 問8. 7 でその他を選んだ人は、具体的な方法を記入してください。7 でそれ以外を選んだ人は、9 に進んでください。
- 問9. レポートや論文の文体について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？

はい                      いいえ

問10. メールの書き方について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？

はい                      いいえ

問11. 奨学金申請書の書き方について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？

はい                      いいえ

問12. エントリーシートの書き方について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？

はい                      いいえ

## 第4章 調査1の結果

以下の表1は留学生向けに文章の書き方についてのテキストの中から抜き出した、レポートや論文で使う表現と日常会話で使う表現との相違点である。いずれの表現も留学生が文章を書く際に注意しなければならないものとして挙げられている。なお、表1の日常会話でよく使う表現文型の後ろに付いている番号は、3.2に挙げたテキストの①～④の番号にあたり、その表現が①～④のテキストに表れていたか否かを表している。

表1 レポートや論文で使う表現と日常会話で使う表現の相違点

	日常会話でよく使う表現	学術的文章でよく使う表現
動詞（V）の連用形接続	V て、……①②④ V なくて/V ないで、……①②④ V ていて、……①④ V ていなくて、……①	V(ます形)、…… V ず/V ずに、…… V ており、…… V ておらず、……
終助詞「か」を使った発問	（ん）ですか① ますか①	（の）だろうか （の）か
その他の終助詞	ね、よ、わ、さ、etc. ① かな、かしら① だよね③	－ だろうか である
接続助詞	けど、けれども①② たら①② から② とき②	が ば/と ので 際
接続詞	だから、ですから①②③④ でも、だけど①②③④ けど②③ それで② だって② あと②③ じゃあ②	そのため/そこで/したがって しかし/だが そのため なぜなら また では
副詞	だいたい① とても① だんだん① 全然② 全部② どんどん②③ たぶん②③ いちばん② 絶対に②	約/ほぼ/およそ きわめて 次第に/徐々に まったく すべて 急速に おそらく もともと かならず

	今② ペラペラ③ ごちゃごちゃ③ すごく③④ ちょっと③④ やっぱり③ たくさん、いっぱい③④	現在 流暢に 混乱 非常に/たいへん 少し/若干 やはり 多くの/多数の
疑問表現	どんな①	どのような/いかなる
指示表現	こんな①③	このような/こうした
縮約形	じゃ①②③④ Vてる①②③④ なきゃ②③ とく②③④ ちゃう③④ どっち③	では Vている なければ ておく てしまう どちら/いずれ
その他	和語① 敬語① 私（筆者自身）③ この論文③ この節③ よく知られている③ ほとんどの人③ 昔③ って③④	漢語 敬語を使わない表現 筆者 本稿/小稿/拙稿 本節 周知 大方 かつて と

表 1 に示すように、①～④のすべてのテキストで扱われていたのは以下の四つである。

- 接続詞「だから、ですから」→「そのため/そこで/したがって」
- 接続詞「でも、だけど」→「しかし/だが」
- 縮約形「じゃ」→「では」
- 縮約形「V てる」→「V ている」

また、①～④のうちの 3 冊で扱われていたのは以下の三つである。

- 動詞（V）の連用形接続「V て、…」→「V（ます形）、…」
- 動詞（V）の連用形接続「V なくて/V ないで…」→「V ず/V ずに…」
- 縮約形「とく」→「ておく」

このような日常会話で頻繁に使われる話し言葉が文章を書く際に間違いやすいものと考えられる。



## 第5章 調査2の結果

本調査では日本語学習者作文コーパス中に存在する、日本語学習者の文体的な誤用を抽出した。その際の検索条件は以下の通りである。

- 誤用のみ表示
- 学習者レベル：中級、上級
- 性別：男、女
- 学習環境：国内
- 誤用タイプ：文体
- 主な母語：中国語
- 日本語履歴：2年未満、2年以上5年未満、5年以上
- テスト成績（文字語彙）：A、B、C、X
- テスト成績（文法）：A、B、C、X

検索を行った結果、表2のような誤用が抽出された。なお表2中の例の（ ）は出現頻度を示している。なお、「→」の左の形式は誤用を表し、右の形式は正用を表している。また、品詞に関する情報は、検索した際のタグ情報による。

表2 コーパス中の文体の誤用

品詞分類	誤用数	例
助動詞	22	ですます調→である調（17） ～てる→～ている（2） でしょう→だろう（2） ましょう→よう（1）
副詞	9	いっぱい→たくさん（2） そ→そう（2） ちょっと→少し（1） とても→非常に（1） 多分→おそらく（1） もっと→より（1） だんだん→徐々に（1）
助詞	9	けど→が（6） 動詞連用形＋て→動詞連用形（2） たら→ば（1）
動詞	3	喋れる→話せる（2） くれない→いただけますか（1）

連体詞	2	いろんな→いろいろな（2）
代名詞	1	どれ→どちら（1）
名詞	1	全部→全て（1）
形状詞	1	大事→重要（1）
合計	48	

表2に示すように、中上級中国人日本語学習者の誤用で最も多いのは助動詞で、誤用数全体の約半分を占めている。この助動詞の誤用は主に文末に普通体を用いるべきところに丁寧体を使用しているものである。他には「てる」のようなモーラの脱落による誤用も見られる。次に多いのは副詞と助詞である。副詞は主に「いっぱい」のような書き言葉ではなく話し言葉を用いる誤用である。他には、「そう」と書くべきところを「そ」と書くといったモーラの脱落がある。助詞は「が」を使うところを「けど」を使ってしまうものが一番多い。他には「動詞の連用形（ます形）」で文を繋げるべきところを「動詞の連用形＋て」で文を繋げる誤用も見られる。以下、順に動詞、連体詞と続き、代名詞、名詞、形状詞はいずれも1例ずつであった。コーパスに出てきた語はほぼ調査1に含まれていた。

## 第6章 調査3の結果

### 6.1 回答者の基本情報

表3は調査3で行ったアンケートに協力してくれた24名の学習者のうち、無効回答を行った1名を除く23名の基本情報である。この中の日本語能力試験の欄に記載してある「N2合格」はN2に合格しているがN1に合格していないことを示している。回答者番号は、回答提出の早かった回答者から順につけた。

表3 回答者の基本情報

回答者	学年	年齢	母語	日本語能力試験 (JLPT)	日本留学試験 (EJU) の日本語科目の点数	日本語学習年数	日本に滞在している年数
1	修士二年	20代	中国語	N1合格	300点～349点	5年以上	4年以上5年未満
2	修士一年	20代	中国語	N1合格	250点～299点	5年以上	3年以上4年未満
3	一年	20代	中国語	N2合格	200点～249点	2年以上3年未満	2年以上3年未満
4	四年	20代	中国語	N1合格	350点～399点	2年以上3年未満	5年以上
5	不明	20代	中国語	N1合格	300点～349点	5年以上	5年以上
6	三年	20代	中国語	N1合格	250点～299点	5年以上	5年以上
7	一年	20代	中国語	N1合格	300点～349点	1年以上2年未満	2年以上3年未満
8	不明	20代	中国語	N2合格	300点～349点	2年以上3年未満	2年以上3年未満
9	四年	20代	中国語	N1合格	250点～299点	5年以上	5年以上
10	修士二年	20代	中国語	N1合格	受けていない。	5年以上	1年以上2年未満
11	修士二年	20代	中国語	N1合格	受けていない。	5年以上	3年以上4年未満
12	一年	20代	中国語	N2合格	300点～349点	2年以上3年未満	2年以上3年未満
13	不明	30代	中国語	N2合格	250点～299点	5年以上	4年以上5年未満
14	不明	20代	中国語	N2合格	250点～299点	1年以上2年未満	1年以上2年未満
15	四年	20代	中国語	N1合格	受けていない。	5年以上	4年以上5年未満
16	修士二年	20代	中国語	N1合格	受けていない。	5年以上	3年以上4年未満
17	不明	20代	中国語	N1合格	受けていない。	1年未満	5年以上

18	不明	20 代	中国語	N1 合格	300 点～349 点	5 年以上	5 年以上
19	四年	20 代	中国語	N2 合格	250 点～299 点	4 年以上 5 年未満	4 年以上 5 年未満
20	修士二年	20 代	中国語	N1 合格	受 け て い な い。	5 年以上	5 年以上
21	不明	20 代	中国語	N2 合格	受 け て い な い。	1 年以上 2 年未満	1 年未満
22	二年	20 代	中国語	N2 合格	300 点～349 点	3 年以上 4 年未満	2 年以上 3 年未満
23	二年	20 代	ベトナム語	N1 合格	250 点～299 点	4 年以上 5 年未満	2 年以上 3 年未満

表 3 に示すように、学年については、回答者番号 5、8、13、14、17、18、21 の 7 名が不明であった。その他は、一年生が 3 名、二年生が 2 名、三年生が 1 名、四年生が 4 名、修士一年が 1 名、修士二年が 5 名であった。

次に、母語については、23 番の回答者のみベトナム語で、残りの 22 名は中国語であった。また、日本語能力試験（JLPT）については、N1 に合格している者が 15 名で、N2 に合格しているが N1 に合格していない者は 8 名である。

次に、日本留学試験（EJU）の日本語科目の点数については、受けていない回答者が 7 名、200～249 点の回答者が 1 名、250～299 点の回答者が 7 名、300～349 点の回答者が 7 名、350～399 点の回答者が 1 名であった。

次に、日本語学習年数については、5 年以上の回答者が 7 名で、最も多かった。そのほかは、一年未満の回答者が 1 名、1 年以上 2 年未満が 3 名、2 年以上 3 年未満が 4 名、3 年以上 4 年未満が 1 名、4 年以上 5 年未満が 2 名であった。

最後に、日本に滞在している年数については、1 年未満が 1 名、1 年以上 2 年未満が 2 名、2 年以上 3 年未満が 6 名、3 年以上 4 年未満が 3 名、4 年以上 5 年未満が 4 名、5 年以上が 7 名であった。

## 6.2 意識調査の回答結果

今回の意識調査の質問は全部で 12 問である。

まず、問 1、問 2 の結果は表 4 の通りである。

表 4 問 1、問 2 の回答結果

回 答 者	問 1. 生活の中で間違った日本語を使った時、周りに指摘してくれる人がいますか？	問 2. それはどのような人ですか？（複数回答可）
1	いいえ	
2	はい	教員、友人、職員、その他
3	はい	教員、その他
4	はい	友人

5	はい	教員、友人、職員
6	はい	教員、その他
7	いいえ	
8	いいえ	
9	いいえ	
10	はい	教員、友人、その他
11	いいえ	
12	いいえ	
13	はい	教員、友人
14	いいえ	友人
15	いいえ	
16	はい	友人
17	はい	教員、友人
18	はい	友人、その他
19	はい	友人
20	はい	友人
21	はい	友人
22	いいえ	
23	いいえ	

表4に示すように、回答者番号14は無効回答であった<sup>7</sup>。問1について「はい」と答えた人は13名で、「いいえ」と答えた人は9名であった。「はい」の回答者は全体の約59%を占めている。問2について「友人」と回答した人が最も多く、11名であった。その次は「教員」で、7名であった。「職員」と回答した人は2名で、「その他」と回答した人は5名であった。

次に、問3、問4、問5の結果は表5の通りである。

表5 問3、問4、問5の回答結果

回答者	問3. 授業で出された課題を提出する前にもう一度見直しますか？	問4. 文体的意味という言葉を知っていますか？	問5. レポートや論文を書く際に、先生から文体に関する指導がありますか？
1	はい	はい	はい
2	はい	はい	はい
3	はい	はい	はい
4	はい	はい	はい
5	はい	はい	はい
6	はい	はい	はい
7	いいえ	はい	はい
8	いいえ	いいえ	はい
9	いいえ	いいえ	いいえ

<sup>7</sup> 回答者番号14は問1で「いいえ」と回答しながら、問2で友人と記載していた。

10	はい	はい	はい
11	はい	はい	はい
12	はい	はい	はい
13	はい	はい	いいえ
14	はい	はい	はい
15	いいえ	はい	はい
16	はい	はい	はい
17	はい	はい	はい
18	いいえ	はい	はい
19	いいえ	はい	はい
20	いいえ	はい	はい
21	はい	いいえ	いいえ
22	はい	はい	いいえ
23	はい	いいえ	はい

表5に示すように、問3については「はい」と回答した人は16名で、全回答者の約70%を占めている。「いいえ」と回答した人は7名であった。問4については「はい」と回答した人は19名で、全回答者の約83%を占めている。「いいえ」と回答した人は4名であった。問5については、「はい」と回答した人は19名で、全回答者の約83%を占めている。「いいえ」と回答した人は4名であった。

次に、問6、問7、問8の結果は表6の通りである。

表6 問6、問7、問8の回答結果

回答者	問6. 文章の目的や文章を読む人にふさわしい表現をどの程度意識していますか？	問7. 文章の目的や文章を読む人にふさわしい表現についてどうやって学習していますか？（複数回答可）	問8. 7でその他を選んだ人は、具体的な方法を記入してください。7でそれ以外を選んだ人は、9に進んでください。
1	そこそこ意識している	日本語学校の授業で学習、大学の授業で学習	無
2	そこそこ意識している	日本語学校の授業で学習、大学の授業で学習	ない
3	そこそこ意識している	日本語学校の授業で学習、その他 →8で具体的な方法を書いてください。	アルバイトの店長
4	そこそこ意識している	大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ	ネットで調べる
5	非常に意識している	日本語学校の授業で学習、大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ	なし
6	とても意識している	大学の授業で学習、友人や周り	日本人の話や文章

		の日本人から教わる、独学で学ぶ	などから気付いて覚える
7	そこそこ意識している	その他 →8 で具体的な方法を書いてください。	インターネットで検索します
8	とても意識している	日本語学校の授業で学習	無効回答 (。)
9	あまり意識していない	日本語学校の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる	
10	非常に意識している	大学の授業で学習、独学で学ぶ、その他 →8 で具体的な方法を書いてください。	他人の論文や関連書籍を読むこと
11	とても意識している	大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ	その他を選んでいない
12	そこそこ意識している	日本語学校の授業で学習	
13	あまり意識していない	大学の授業で学習、独学で学ぶ	なし
14	まったく意識していない	日本語学校の授業で学習	無効回答 (お)
15	そこそこ意識している	大学の授業で学習、独学で学ぶ	
16	とても意識している	大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ	なし
17	そこそこ意識している	独学で学ぶ	なし
18	とても意識している	大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる	なし
19	そこそこ意識している	日本語学校の授業で学習、大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる	なし
20	とても意識している	友人や周りの日本人から教わる	なし
21	あまり意識していない、非常に意識している	日本語学校の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ	無効回答 (sb)
22	とても意識している	日本語学校の授業で学習、大学の授業で学習、独学で学ぶ	一般的に、しかし、つまり後ろの文が大切です
23		日本語学校の授業で学習、大学の授業で学習	

表6に示すように、回答者番号21は問6については2つの回答を選んでおり、無効回答であった。「そこそこ意識している」と回答した人は9名で、最も多かった。「まったく意識していない」と回答した人は1名で、「あまり意識していない」と回答した人は2名であった。「とても意識している」と回答した人が7名で、「非常に意識している」と回答した人は2名であった。何も答えてない人は1名であった。問7については「大学の授業で学習」と回答した人が14名で、最も多かった。その次は、「日本語学校の授業で学習」と回答した人が12名であった。

続いて、「独学で学ぶ」と回答した人が 11 名で、「友人や周りの日本人から教わる」と回答した人が 10 名であった。「その他」と回答した人は 3 名であった。問 8 については、「その他」を選択した者は 3 名であったが、「その他」を選択しなかった 4 名も記入していた。

最後に、問 9、問 10、問 11、問 12 の結果は表 7 の通りである。

表 7 問 9、問 10、問 11、問 12 の回答結果

回答者	問 9. レポートや論文の文体について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？	問 10. メールの書き方について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？	問 11. 奨学金申請書の書き方について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？	問 12. エントリーシートの書き方について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？
1	はい	はい	いいえ	はい
2	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
3	いいえ	はい	いいえ	いいえ
4	はい	はい	はい	はい
5	はい	はい	いいえ	はい
6	はい	はい	いいえ	いいえ
7	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
8	いいえ	はい	いいえ	いいえ
9	いいえ	いいえ	いいえ	はい
10	はい	いいえ	いいえ	いいえ
11	はい	はい	いいえ	いいえ
12	はい	はい	いいえ	はい
13	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
14	はい	はい	はい	はい
15	はい	いいえ	いいえ	はい
16	はい	はい	いいえ	いいえ
17	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
18	いいえ	はい	いいえ	はい
19	はい	いいえ	いいえ	いいえ
20	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
21	いいえ	はい	いいえ	はい
22	はい	はい	いいえ	はい
23	はい	はい	いいえ	いいえ

表 7 に示すように、問 9 については「はい」と回答した人は 13 名で、全回答者の約 57% を占めている。「いいえ」と回答した人は 10 名であった。問 10 については「はい」と回答した人は 14 名で、全回答者の約 61% を占めている。「いいえ」と回答した人は 9 名であった。問 11 については、「はい」と回答した人も 2 名で、全回答者の約 1 % であった。「いいえ」と回答した人は 21 名であった。問 12 につ



いては「はい」と回答した人は 10 名で、全回答者の約 43%を占めている。「いいえ」と回答した人は 13 名であった。

### 6.3 文体テストの結果

ここからは文体テストの結果を見ていく。

#### 6.3.1 問題 1

ここでは問題 1 の結果を示す。以下 3.4 で示した問題 1 を再掲する。

問題 1 次の下線をつけた語は、レポートや論文ではどう書きますか。下の選択肢の中から一つずつ選んでください。

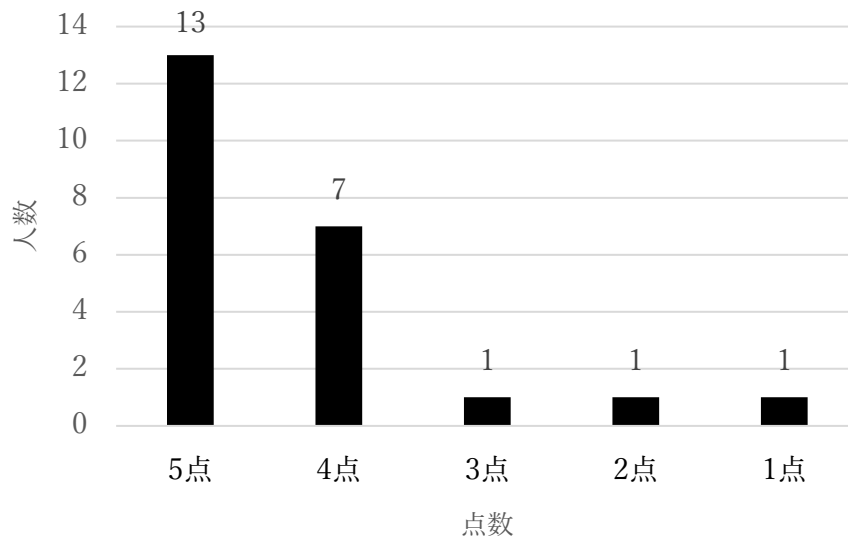
- ① 高齢人口がだんだん増加してきた。
- ② 世界中でたくさんの人がインターネットを利用している。
- ③ 月の直径は地球のだいたい4分の1である。
- ④ この病気の原因は、まだ解明されていない。
- ⑤ 今年度は昨年度よりもっと売り上げが伸びた。

A 次第に B はるかに C さらに D 多くの E およそ F わずかに  
G いまだに

この問題は『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』(p. 14) に掲載されていた問題である。本テキストに掲載されていた正答は、以下の通りである。

①A ②D ③E ④G ⑤C

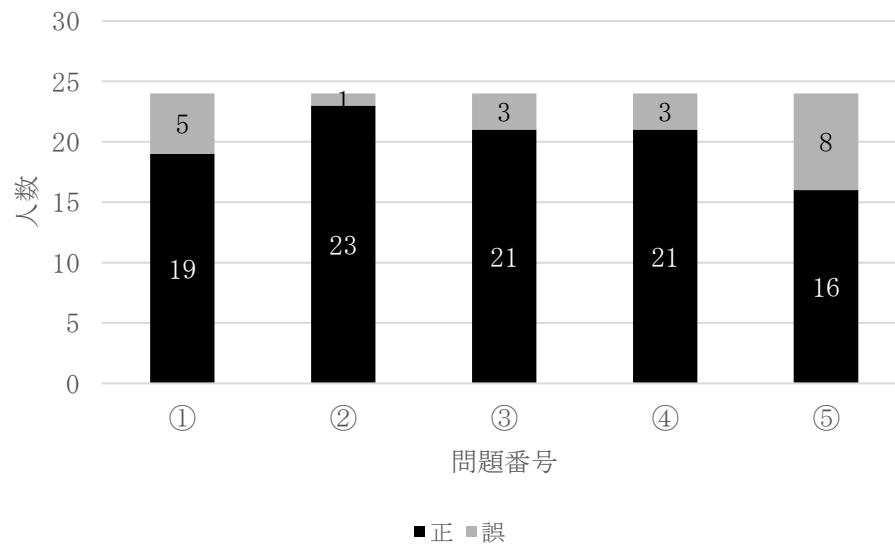
配点は各 1 点で 5 点満点とした。次のグラフ 1 は各得点を獲得した回答者数を示している。



グラフ 1 問題 1 の各得点数を獲得した回答者数

グラフ 1 が示すように、満点を取った回答者は 13 名で、全回答者の約 57% を占めている。4 点を取った回答者は 7 名で、全回答者の約 30% を占めている。3 点、2 点、1 点を取った回答者は各 1 名であった。

次にグラフ 2 は問題 1 の各質問の正答者と誤答者の人数を示している。



グラフ 2 各質問の正答者と誤答者の人数

グラフ 2 に示すように、正答率が最も高いのは問題 1 の②である。誤答者は 1 名しかいなかった。次に正答率が高かったのは問題 1 の③④で、③④のいずれも誤答者は 3 人であった。次いで正答率が高かったのは問題 1 の①で、誤答者は 5 人であった。もっとも正答率が低かったのは、問題 1 の⑤で、誤答者は 8 人であった。

### 6.3.2 問題 2

ここでは問題 2 の結果を示す。以下 3.4 で示した問題 2 を再掲する。

問題 2 次の文は論文の中で使われている文です。(A) (B) に入る適切な表現を下の選択肢の中からすべて選んでください。

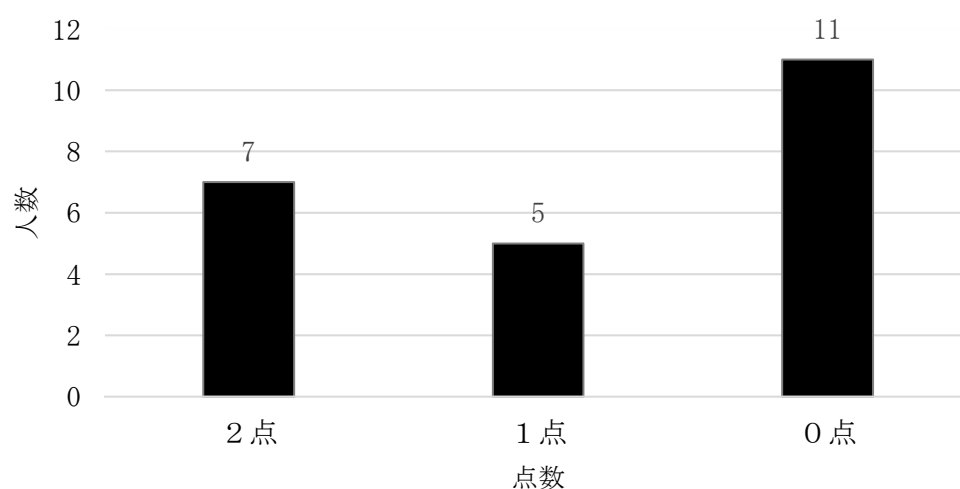
(A) は「輸出が 2.5 倍になる一方、輸入は 13 倍になり、市場は大混乱を生じた」と (B)。

A: ア 森さん      イ 森 (1987)      ウ 森先生      エ 森      オ 森氏  
B: ア 述べている      イ 述べられた      ウ 述べています      エ 述べた      オ 述べました

この問題の正答は以下の通りである。

A: イ エ オ      B: ア エ

配点は A と B 各 1 点で 2 点満点とした。ただし、この場合は、A についても、B についても、正答のいずれかを回答しており、かつ誤答を回答していない者の得点を 1 点とし、この条件が 1 つでも欠けている者は 0 点とした。次のグラフ 3 は各得点を獲得した回答者数を示している。



グラフ3 問題2の各得点数を獲得した回答者数

グラフ3が示すように、2点満点を取った回答者は7名で、全回答者の30%を占めている。1点を取った回答者は5名で、0点を取った回答者が最も多く、11名いた。

また、この問題では、Aに関しては、アの「森さん」を選択した人が、23人中9人と最も多く、Bに関しては、イの「述べられた」を選択した人が、23人中8人と最も多かった。

次に問題2に関して、Aの正答者、誤答者とBの正答者、誤答者に相関性があるかを調べた。それぞれの正答者、誤答者の数は以下の表8の通りである。

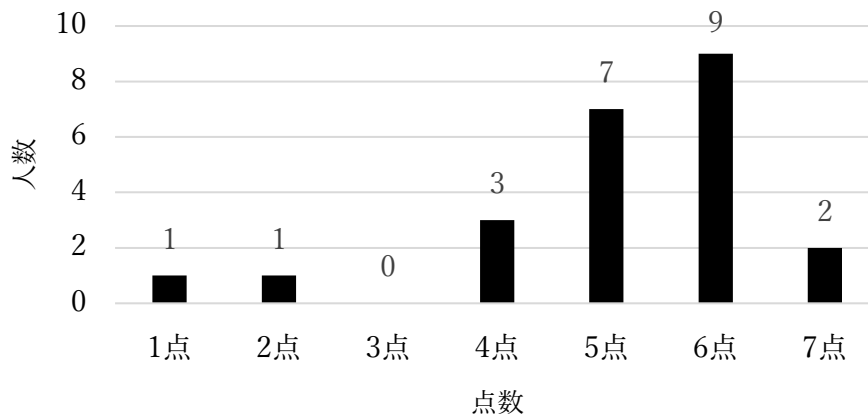
表8 A、Bの正答者と誤答者の数

	Bの正答者	Bの誤答者
Aの正答者	8	4
Aの誤答者	0	11

フィッシャーの検定を行ったところ、Aの正答者がBでも正答した比率とAの誤答者がBで正答した比率には $p < 0.01$ で、有意差が認められた。したがって、引用元の著者の主語として、適切な表現を選べた人は文末表現としても適切な表現を選べる傾向にある。反対に、引用元の著者の主語として、適切な表現を選べなかった人は文末表現でも適切な表現を選べない傾向にあると言える。

次に問題1と問題2の合計得点と学習年数、滞在歴、意識調査の結果との関係性を見ていく。

次のグラフ4は問題1と問題2の各合計得点を獲得した回答者数を示している。



グラフ4 問題1と問題2の各合計得点数を獲得した回答者数

グラフ4が示すように、回答者数が一番多いのは6点で、9名であった。次に多いのは5点を取った回答者で、7名であった。次いで4点を取った回答者が3名、満点7点を取った回答者が2名、1点と2点を取った回答者が各1名と続く。3点を取った回答者は一人もいなかった。

以下まず意識調査の問1、問3、問4、問5、問9と得点との相関性について調べた。

問1. 生活の中で間違った日本語を使った時、周りに指摘してくれる人がいますか？

問3. 授業で出された課題を提出する前にもう一度見直しますか？

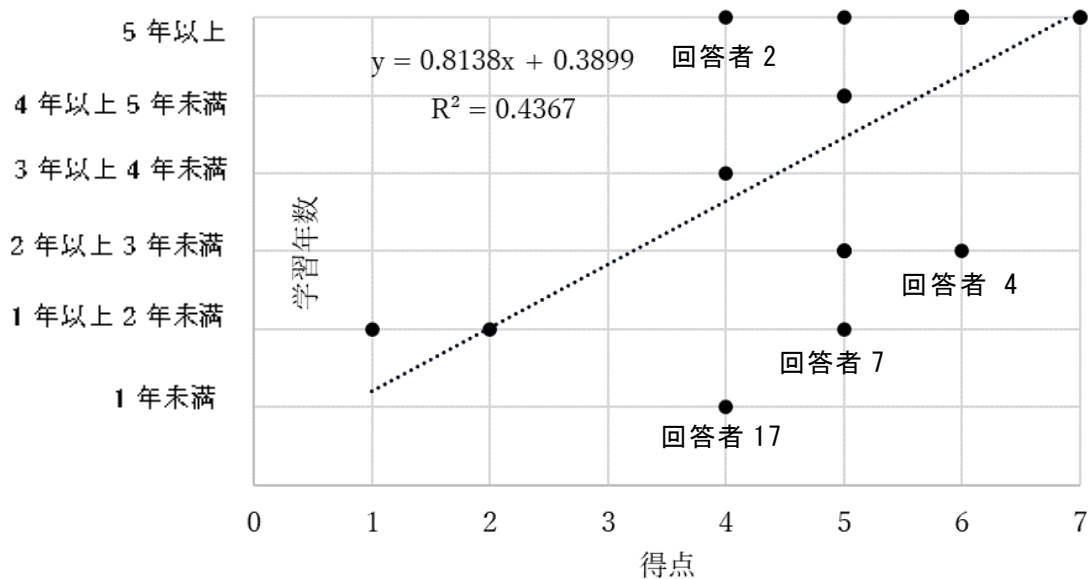
問4. 文体的意味という言葉を知っていますか？

問5. レポートや論文を書く際に、先生から文体に関する指導がありますか？

問9. レポートや論文の文体について学ぶ授業や課外講座を受けたことがありますか？

いずれの質問項目も「はい」「いいえ」で答えるものであったので、6点、7点を獲得した高得点者とその他の2群で「はい」「いいえ」の比率に差があるかどうかフィッシャー検定を行った。その結果、いずれの質問項目も有意差が認められなかった。

次に各回答者の学習年数と回答者が獲得した得点との相関性について調べた。グラフ5は各回答者の学習年数と回答者が獲得した得点の関係を示した散布図である。



グラフ 5 学習年数と回答者が獲得した得点の関係

グラフ 5 が示すように、学習年数と得点の決定係数  $R^2$  は 0.43 であったが、相関係数  $R$  は 0.66 で、中程度の相関性が認められた。

グラフ 5 について、回帰直線から大きく外れている回答者について、意識調査の結果や日本語能力試験などの結果との関係性についても調べてみた。その結果は以下の通りである。

まず、回答者番号 2 については、日本語の学習年数が五年以上であったが、獲得点数が 4 点しかなかった。この回答者は日本語能力試験 N1 に合格している。しかし、同じ五年以上の学習歴で、満点 7 点を取った回答者番号 5、10 と比較すると、文体意識に関する質問に対し、2 番の回答者は「そこそこ意識している」と回答したが、5 番と 10 番回答者は「非常に意識している」と回答していた。

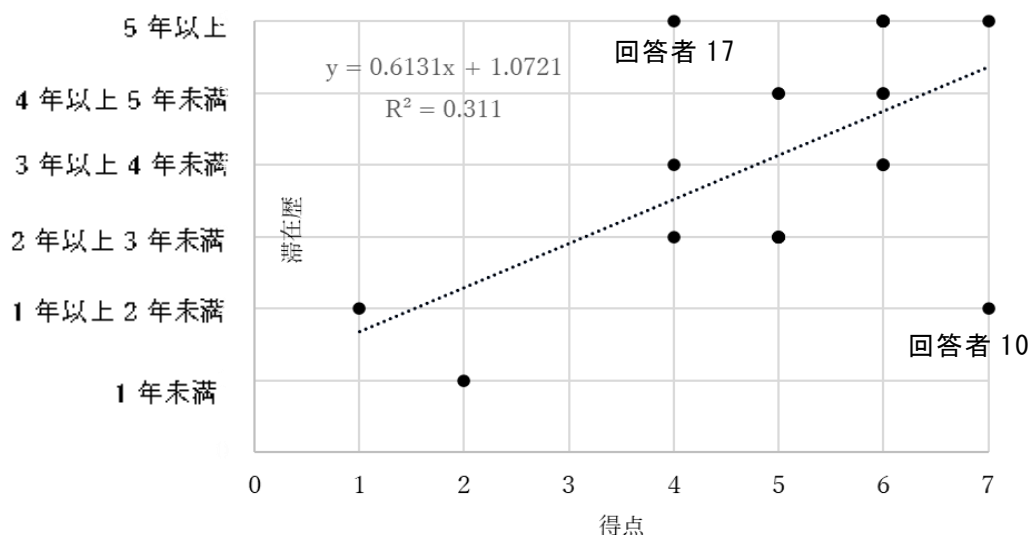
次に、回答者番号 4 については、日本語の学習年数が 2 年以上 3 年未満であったが、獲得点数が 6 点であった。しかしこの回答者の滞在歴は 5 年以上あって、N1 にも合格し、日本留学試験も好成績 (350~390) であった。また意識調査についても、レポートや論文に関する項目 1、3、4、5、9 のいずれも「はい」を選択した。文体のふさわしさと学習方法については「そこそこ意識している」、「大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ、ネットで調べる」と答えていた。

次に、回答者番号 7 については、日本語の学習年数が 1 年以上 2 年未満しかな

かったが、獲得点数は 5 点であった。この回答者は滞在歴が 2 年以上 3 年未満であるが、N1 に合格している。意識調査の項目 4、5 について「はい」を選択し、文体のふさわしさと学習方法については「そこそこ意識している」、「インターネットで検索する」と答えていた。

次に、回答者番号 17 については、日本語の学習年数が 1 年未満であったが、獲得点数が 4 点であった。しかしこの回答者は N1 に合格しており、日本の滞在歴も長く、5 年以上であった。また意識調査の項目 1、3、4、5 について、「はい」を選択し、文体のふさわしさと学習方法については「そこそこ意識している」、「独学で学ぶ」と答えていた。

最後に、各回答者の滞在歴と回答者が獲得した得点の相関性についても調べた。次のグラフ 6 は各回答者の滞在歴と回答者が獲得した得点の関係を示した散布図である。



グラフ 6 滞在歴と回答者が獲得した得点の関係

グラフ 6 が示すように、回答者の得点と日本の滞在歴の決定係数  $R^2$  は 0.31 であったが、相関係数  $R$  は 0.55 で、中程度の相関性が認められた。このように回答者の滞在期間は回答者の得点と全く無関係とは言えない。しかし、滞在歴より学習年数のほうが、相関性が高いことが分かった。

グラフ 6 について、回帰直線から大きく外れている回答者について、意識調査

の結果や日本語能力試験などの結果との関係性についても調べてみた。その結果は以下の通りである。

回答者番号 10 については、日本の滞在歴が 1 年以上 2 年未満しかなかったが、獲得点数が 7 点であった。しかしこの回答者の学習年数は 5 年以上であって、N1 にも合格している。また意識調査のレポートや論文に関する項目 1、3、4、5、9 のいずれも「はい」を選択した。文体のふさわしさと学習方法については「非常に意識している」、「大学の授業で学習、独学で学ぶ、他人の論文や関連書籍を読む」と答えていた。

回答者番号 17 は滞在歴 5 年以上であったが、得点が 4 点しかなかった。ほかの滞在歴が 5 年以上の高得点の回答者と比較すると、日本語の学習歴が短かった。

### 6.3.3 問題 3

ここでは問題 3 の結果を示す。回答がなかったことにより、回答者番号 9、14、21 は無効回答とした。また問題 3 の③については英語訳 asked に問題があったため、無効問題とした。以下 3.4 で示した問題 3 を再掲する。

問題 3 ( ) 中の英語の意味に合う日本語表現を書いてください。なお { } 中はそれぞれの表現が使われた場面を表しています。

- ① {先生に久しぶりに会いたいことを伝える E メール}  
来月東京へ行くことになりましたので、先生に (want to meet) と思い、ご連絡しました。
- ② {日本語教室を見学させてもらいたいことを伝える E メール}  
クラスのレベルなどがよく (do not know) ので、できれば一度、見学させていただきたいと思っています。
- ③ {講師に会の延期を伝える E メール}  
村上様に講師を (asked) 4 月 9 日の交流会の件です。
- ④ {日本語の先生に大学に合格したことを伝える E メール}  
勉強が (it was hard) ので、合格できて本当にうれしいです。
- ⑤ {商品の配送遅れについて苦情を言う E メール}  
こちらのホームページでデジタルカメラを (ordered) が、2 週間経ったのにまだ届きません。
- ⑥ {先生に奨学金の推薦状を依頼する E メール}  
来年は卒論でアルバイトが (can not) ので奨学金を応募したいのですが、推薦状が必要だそうです。
- ⑦ {奨学金申請書}  
父は会社で勤務 (works)。



⑧ {奨学金申請書}

私の兄は知的障害を持っており、常に母がサポートしています。  
(so)、父の収入だけに頼っていますが、生活費は出せても、私の学  
費までは用意できないと言われてしています。

⑨ {エントリーシートの自己PR}

私は自身が所属する大学のサークルの練習参加率が悪いことに問題意  
識を持って (had)。

⑩ {エントリーシートの志望動機}

(Your company)のマーケティングを通じて、自身のスキル向上を実  
現したいと考えています。

この問題の模範回答は以下の通りである。

①お会いしたい ②わからない ③お願いしておりました ④大変だっ  
た ⑤注文しました ⑥できない ⑦しています ⑧そのため ⑨持  
っていました ⑩貴社

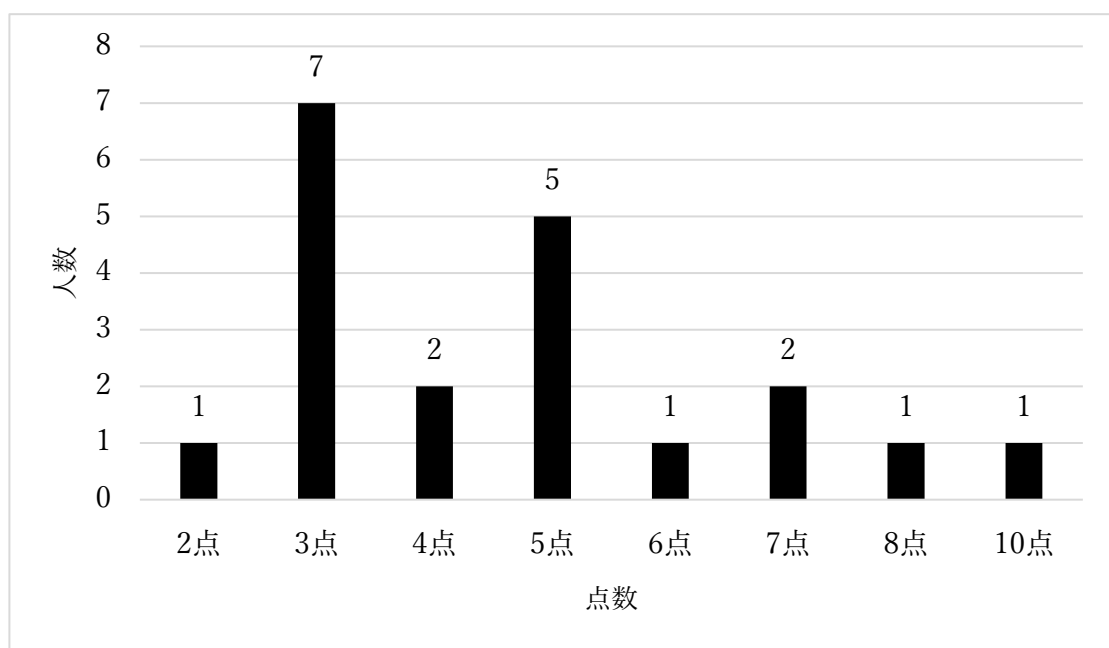
配点は各問題 1 点とし、②、④、⑥、⑦、⑨についてはより丁寧な回答を使っ  
た回答者には、1 点をプラスした。次の表 9 は回答者の模範回答以外の回答である。

表 9 模範回答以外の回答

①	お目にかかり たい (1 点)	会いたい (0 点)	会おう (0 点)	伺いに行く (0 点)		
②	わかりません (2 点)	存じません (0 点)	知りません (0 点)	存じ上げませ ん (0 点)	知ってない (0 点)	知らない (0 点)
④	大変でした (2 点)	難しかった (1 点)	苦しかったで す (1 点)	とても難しか った (1 点)	一生懸命 (0 点)	苦手な (0 点)
④	頑張った (0 点)	大変な (0 点)				
⑤	順序付けられ ました (0 点)	状況 (0 点)	購入した (0 点)	注文した (0 点)	注文済です (0 点)	注文 (0 点)
⑥	できません (2 点)	無理な (1 点)	難しい (1 点)	規定しました (0 点)	できなくて (0 点)	
⑦	しております (2 点)	仕事 (0 点)	働いています (0 点)	する (0 点)	している (0 点)	します (0 点)
⑦	を務めている (0 点)	仕事します (0 点)	仕事先 (0 点)	勤務 (0 点)	仕事です (0 点)	できない (0 点)

⑧	このように (0 点)	ために (0 点)	そして (0 点)	なので (0 点)	それで (0 点)	だから (0 点)
⑧	ですから (0 点)	したがって (0 点)				
⑨	持った (1 点)	持ちました (1 点)	持っていた (1 点)	ありました (0 点)	した (0 点)	持っています (0 点)
⑨	持っています (0 点)	貰いました (0 点)	持ちます (0 点)	しました (0 点)	持つ (0 点)	大変 (0 点)
⑨	持ってきた (0 点)	持っている (0 点)				
⑩	御社 (1 点)	貴方の会社 (0 点)				

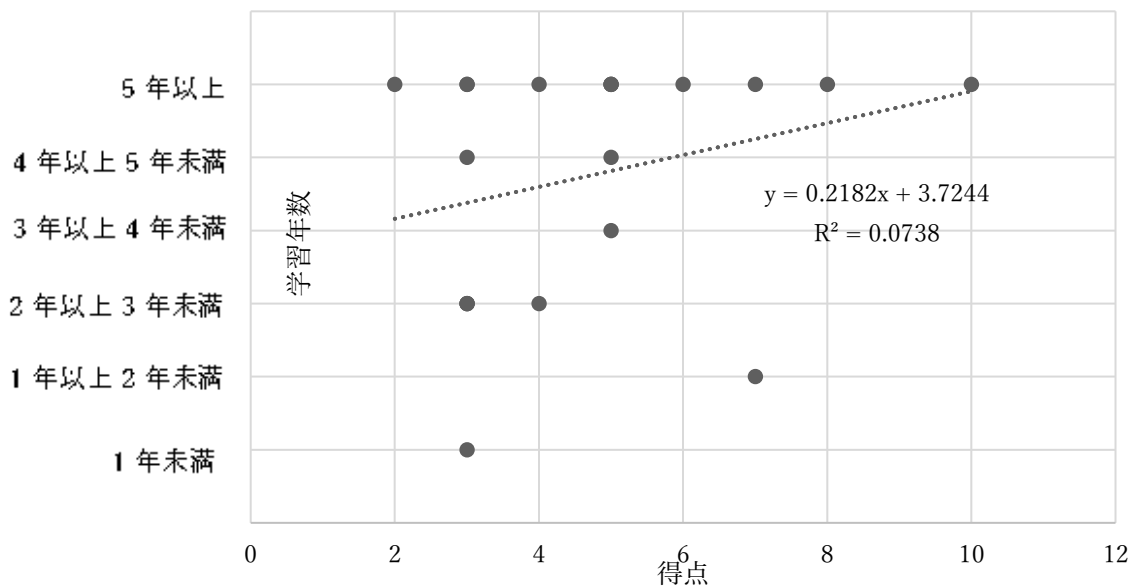
次のグラフ 7 は問題 3 の 9 問の各得点を獲得した回答者数を示している。



グラフ 7 問題 3 各得点数を獲得した回答者数

グラフ 7 が示すように、回答者数が一番多いのは 3 点で、7 名であった。次に多いのは 5 点を取った回答者で、5 名であった。次いで 4 点と 7 点を取った回答者が各 2 名、2 点、6 点、8 点、10 点を取った回答者が各 1 名と続く。

次に各回答者の学習年数と回答者の回答者が獲得した得点との相関性について調べた。グラフ 7 は各回答者の学習年数と回答者が獲得した得点の関係を示した散布図である。



グラフ 8 学習年数と回答者が獲得した得点の関係

グラフ 8 が示すように、回答者の得点と日本語の学習年数の決定係数  $R^2$  は 0.0738 であったが、相関係数  $R$  は 0.27 で、弱い相関性が認められた。

最後に、各回答者の滞在歴と回答者が獲得した得点の相関性についても調べた。回答者の得点と日本語の学習年数の決定係数  $R^2$  は 0.015 であったが、相関係数  $R$  は 0.12 で、ほぼ相関性がないことがわかった。

#### 6.3.4 問題 4

ここでは問題 4 の結果を示す。回答がなかったことにより、回答者番号 8、9、14、21 は無効回答とした。以下 3.4 で示した問題 4 を再掲する。

問題 4 次の文章を読み、例のように論文で使わない方がよい表現に下線を引き、論文らしい表現に直してください。

私はこの論文で日本とアメリカの教育制度の違いについて書きますよ。どっちの国でも大学で何を学ぶかは、大学に入る前に何を学んだかによって違うんだなあ。日本じゃ、小学校とか中学校とか高校ですごくいっぱい勉強するから大学での勉強はあんまり強調されない。でも、アメリカでは大学に入る前にあんまり勉強をしないから、大学に入ってから勉強が重要である。

例：私はこの論文で→本稿では

この問題の模範回答は以下の通りである。

①私はこの論文で→本稿では ②書きますよ→述べる ③どっち→いずれ ④違うんだなあ→違う ⑤じゃ→では ⑥とか→や ⑦すごく→非常に ⑧いっぱい→よく ⑨から→ので ⑩あんまり→あまり ⑪でも→しかし ⑫大学に入ってから→大学入学後

以下②～⑫についてどのような回答があったかを表 10 に記す。( ) 内の数字は回答者数を示している。

表 10 ②～⑫の回答

元の表現	修正が適切だった表現	修正が不適切だった表現	合計
②書きますよ	論じる (2)、記述する (1)	書く (2)、書きました (2)、書きます (2)、書いた (1)、研究する (1)、書いてみる (1)、論じている (1)、述べます (1)、論じます (1)、理解できた (1)	16
③どっち	どちら (6)	両国 (2)、どの (1)	9
④違うんだなあ	違う (2)、違っている (1)、違うだろう (1)、異なる (1)、違うと考えられる (1)、異なっている (1)	違います (2)、についてが異なる (1)、違うのである (1)、違うんだ (1)、区別があります (1)	13
⑤じゃ	では (12)	において (1)	13
⑥とか	や (2)	および (1)	3
⑦すごく	非常に (4)、かなり (2)	大変 (2)、とても (1)、一生懸命 (1)、真剣な (1)、多量に (1)	12
⑧いっぱい		大変 (2)、多めに (1)、たくさん (1)、一生懸命 (1)、真剣な (1)、多量に (1)	7
⑨から	ので (4)	のため (1)	5
⑩あんまり	あまり (7)、さほど (1)	ほぼ (1)	9
⑪でも	しかし (5)、だが (1)、それに対して (1)		7

⑫ 大学に入ってから		大学に入学後（１）	1
------------	--	-----------	---

問題４の回答については、本来直さなくてもいいところを直している箇所が６箇所あった。詳しくは以下の通りである。

- １．違い→相違点　２．について→に関し　３．何を学んだか→学ぶ内容・何を学んだこと　４．するから→してきているため　５．である→であると思われる　６．強調されない→強調されないである

表１０に示したように、最も修正が多かったのは②の「書きますよ」であり、１６名が修正していた。次いで多かったのは④「違うんだなあ」と⑤「じゃ」で、いずれも１３名が修正していた。次に多かったのは⑦の「すっごく」であり、１２名が修正していた。その次に多かったのは③の「どっち」と⑪の「あんまり」であり、いずれも９名が修正していた。次に多かったのは⑧の「いっぱい」と⑩の「でも」であり、同じく７名が修正していた。以下⑨「から」５名、⑥「とか」３名、⑫「大学に入ってから」１名と続く。

配点は①～⑫各１点で１２点満点とした。これ以外の修正の必要がない箇所を修正した場合については点数を加えないこととした。次の表１１は問題４の各回答者の得点数を示している。

表 11 問題４の各回答者の得点数

回答者番号	1	2	3	4	5	6	7	10	11	12
得点数	7点	3点	0点	7点	6点	5点	1点	5点	3点	1点
回答者番号	13	15	16	17	18	19	20	22	23	
得点数	0点	0点	4点	1点	0点	1点	2点	6点	0点	

表１１に示すように、点数が最も高い人は７点を獲得した回答者番号１と４であった。次いで高かったのは６点を獲得した回答者番号５と２２であった。７点と６点の高得点を得た回答者番号１、４、５、２２の４名は問題１と問題２の合計得点も次のように高い点数を得ていた。

- 回答者番号１：問題１と問題２の合計得点＝７点満点中の６点  
回答者番号４：問題１と問題２の合計得点＝７点満点中の６点  
回答者番号５：問題１と問題２の合計得点＝７点満点中の７点  
回答者番号２２：問題１と問題２の合計得点＝７点満点中の４点

以上、本章では、本研究で行った調査３の結果を見てきた。次章では、第４章

から第6章まで見てきた調査結果を踏まえ、第1章で提示したリサーチクエスチョンならびに、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けられるようになるためには、何が必要かについて考察する。

## 第7章 考察

第1章に示したように本研究では、以下の三つをリサーチクエスチョンとした。

1. 日本の大学や大学院で学ぶ留学生が文体的意味の習得の観点からレポートや論文中で間違いやすいのはどのような語か。日本の大学や大学院で学ぶ留学生は、レポートや論文に適した語の選択に関してどの程度意識しているか。
2. 日頃からレポートや論文に適した語の選択をころがけている学習者は、特にどのような方法でその知識を得ようとしているのか。
3. 文体的意味の理解度が高い学習者と文体的意味の理解度が低い学習者の相違には、どのような要因が関係しているのか。

以下、まず、7.1と7.2では、調査結果に基づき、リサーチクエスチョン1に対する考察を行う。次に、7.3では、調査結果に基づき、リサーチクエスチョン2に対する考察を行う。また、7.4では、調査結果に基づき、リサーチクエスチョン3に対する考察を行う。最後に、7.5では、これらの考察を踏まえ、中上級の日本語学習者が文体に合わせた語の選択能力上げるために必要なことは何かについて考察する。

### 7.1 レポートや論文中で間違いやすい語

日本語学習者がレポートや論文を書く際に間違いやすい語を抜き出すために、本研究では調査1、調査2、調査3の3種類の調査を行った。調査1では、本学の図書館にある留学生向けに書かれた文章の書き方についてのテキストの中から文体に関して留学生が間違いやすい語を抜き出した。留学生向けに書かれた文章の書き方についてのテキストの調査からは、以下のような語が間違いやすい語として取り出された。

- 接続詞「だから、ですから」→「そのため/そこで/したがって」
- 接続詞「でも、だけど」→「しかし/だが」
- 縮約形「じゃ」→「では」
- 縮約形「Vてる」→「Vている」

いずれも、日常生活の会話の中で頻繁に使われる語である。そのことから、このような日常生活で頻繁に使われる話し言葉がレポートや論文を書く際に間違いやすいものと考えられる。

次に、調査 2 では、「日本語学習者作文コーパス」を利用し、「日本語学習者作文コーパス」中の文体的な誤用を抽出した。「日本語学習者作文コーパス」の調査結果からは、中上級中国人日本語学習者の誤用で最も多いのは助動詞で、誤用数全体の約半分を占めており、中でも、文末に普通体を用いるべきところに丁寧体を使用しているものが多いことが明らかとなった。この理由については、調査 3 の結果の考察の部分で言及する。

最後に、調査 3 では調査 1 と調査 2 に基づいて、日本に滞在する N2、N1 に合格している日本語学習者に対して文体的意味の理解度に関するテストを行った。調査 3 で行ったテストでは、問題 1、2、4 がレポートや論文で使用する表現と関わるものであった。

まず、問題 1 は、主にレポートや論文で使われる副詞に関するテストであった。満点を取った回答者は全回答者の約 57% を占めており、全体的に正答率が高かった。

最も正答率が低かったのは⑤の「もっと」の代わりに「さらに」を選ぶ問題であった。誤答者は、24 名中 8 名で、このうち、「多く」を選択した人が 4 名、「はるかに」を選択した人が 3 名、「およそ」を選択した人が 1 名であった。

この問題 1 は、レポートや論文にふさわしくないそれぞれの語に対して、レポートや論文にふさわしい語を選択肢から選ぶ問題である。この問題を解くにあたっては、各選択肢の語の意味の違いを正確に理解していることが重要なポイントとなる。したがって、本調査結果から、「もっと」「さらに」「多くの」「はるかに」の意味の使い分けが困難であることが確認できたが、「もっと」を「さらに」に置き換えられなかった理由については文体的意味の理解と関係があるとは言えない。

次に、問題 2 は、レポートや論文で使われる引用文に関するテストであった。引用元の主語や引用を表す述語として適切な語を選択できるかを調べるものであった。この問題は、2 点満点の問題であったが、満点を取った回答者は 7 名で、全回答者の 30% に過ぎず、0 点を取った回答者が 11 名と最も多く、全回答者の 46% であった。また、A の引用元の主語の選択に関しては、アの「森さん」を選択した人が最も多く、B の引用を表す述語に関しては、イの「述べられた」を選択した人が、最も多かった。

このように、引用の時の表現の正答率が低い理由としては、二つ挙げられる。一つは、レポートや論文を書くときの引用のルールに関する知識が不十分であることである。もう一つは「述べられた」を受け身表現として理解しており、論文やレポートでは「考えられる」のような受け身表現が望ましいととらえた可能性があることである。

この他、引用元の著者の主語として、適切な表現を選べた人は、引用を表す述語として適切な語を選べる傾向にあることが明らかとなった。このことは、反対に、引用元の著者の主語として適切な表現を選べなかった人は、引用を表す述語として



も適切な表現を選べない傾向にあることを意味する。このことから、引用の方法を理解している人は引用元の著者を表す表現と引用を表す述語をセットで覚えていることが示唆される。

最後に問題 4 は、論文で使わない方がよい表現を選択し、論文にふさわしい表現に直すものであった。最も修正が多かったのは②の「書きますよ」であり、次いで多かったのは④の「違うんだなあ」と⑤の「じゃ」であった。また最も修正が少なかったのは、⑫「大学に入ってから」であり、次いで、⑥の「とか」、⑨の「から」と続く。この結果は、2.2 で示した高野（2011）の研究結果とほぼ同様で、②の「書きますよ」、④「違うんだなあ」のような文末表現と⑤「じゃ」のような縮約形の認識度が高いことが明らかになった。しかし、②の「書きますよ」については、高野の調査結果とは異なり、適切に修正した割合は低かった。修正が不適切だった表現は表 10 の通りである。また、⑨の「から」、⑥の「とか」、⑫の「大学に入ってから」の認識度が低かった。高野も論文中で「～とか」の認識度が低かったと指摘している。

回答の中で修正が不適切だった表現は大きく 4 種類に分けられる。まず「書きました」のような丁寧体を使った誤用である。次は「たくさん」のような固い改まった表現にしなければならないところに、日常会話で用いる砕けた表現を使用している誤用である。その次は「違うのである」のような文法の誤用である。最後は「述べる」「論じる」「記述する」などを用いるべきところで、「理解できた」のような不適切な語を用いた誤用である。

多くの学習者は、一般的な作文で使用する表現とレポートや論文を書くときの表現に違いがあることは認識しつつも、レポートや論文にふさわしい表現そのものがどのようなものなのかについての十分な理解には至っていない。この原因としては、二つ考えられる。一つは、日本語学習者が日本語の「書く」技能を練習する際に、最初は「私の一日」のように改まった表現を必要としない作文を書くことから始まり、一般的な作文で使用する文体に慣れてしまっていることである。もう一つは、レポートや論文に適した表現を学習する機会があまり多くないことである。

## 7.2 レポートや論文に適した語の選択に対する意識

意識調査問 3、問 4、問 5、問 6、問 9 では、レポートや論文を書く際の語の選択に対する意識に関して調査した。その結果、まず、問 3 の「課題を提出する前にもう一度見直す」人は全回答者の約 70%を占めていた。次に、問 4 の「文体的意味という言葉を知っている人」は 83%を占めていた。次に、問 5 の「レポートや論文を書く際に、先生から文体に関する指導がある」人は約 83%を占めていた。次に、問 6 の「文章の目的や文章を読む人にふさわしい表現」について「そこそこ意識している」、「とても意識している」、「非常に意識している」と回答した人は約全体の 82%を占めていた。最後に、問 9 の「レポートや論文の文体について学

ぶ授業や課外講座を受けたことがある」人は全回答者の約 57%を占めていた。以上の 5 問の回答を検討すると、回答者がレポートや論文に適した語の選択に対して一定の意識を持っていることが分かった。また、このような一定の意識を持っている人たちが、レポートや論文の文体について学ぶ授業や課外講座を受けているかについては、受けている人の割合は低くはないが高いとも言えない。さらに、「レポートや論文を書く際に先生から文体に関する指導がある」人は比較的多かったが、指導の具体的な内容（注意喚起だけか、書き方の指導があったのか、事前指導か、事後指導か、など）までは不明である。この数値からレポートや論文に適した表現を学習する機会が十分であるとは断定できない。

### 7.3 どのような方法で文体的意味を獲得しようとしているか

意識調査の問 7 と問 8 では、文体的意味を獲得する方法について調査した。問 7 については「大学の授業で学習」と回答した人が最も多かった。次いで、順に「日本語学校の授業で学習」、「独学で学ぶ」、「友人や周りの日本人から教わる」と回答した人が続く。問 8 の「その他」については、「ネット検索」「関連論文や書籍を読む」の回答もあった。また、方法として複数の方法を選択している人が多かった。以上のことから、文体的意味の学習については、教育機関での学びに依存する人が多いことが分かる。そのほかの方法については、補足的な役割を担っていると考えられる。

### 7.4 文体的意味の理解度に影響を及ぼす要因

6.3.2 では問題 1 と問題 2 の合計得点と回答者の学習年数、滞在歴、意識調査との関係性を分析した。

まず、6.3.2 で示したように、回答者の問題 1 と問題 2 の合計得点と学習年数については中程度の相関性が認められた。また、回答者の問題 1 と問題 2 の合計得点と日本の滞在歴についても、中程度の相関性があると認められた。この結果から、日本語を学習した時間と日常的に日本語に触れることのできる言語環境、日本語を使用する機会の多さは文体的意味の理解度に影響しているといえる。また、6.3.2 で示した相関係数の値より、日常的に日本語に触れることのできる言語環境や日本語を使用する機会の多さと比べると、実際の学習時間のほうがより影響が大きいといえる。

次に、回答者の問題 1 と問題 2 の合計得点と意識調査の問 1、問 3、問 4、問 5、問 9 との相関性については、6.3.2 でも述べたように、6 点、7 点を獲得した高得点者とその他の 2 群で有意差が認められなかった。しかし、文体的意味の理解に対する回答者の意識が回答者の獲得した点数に全く影響していないと言い切れない。なぜなら、回答者の問題 1 と問題 2 の合計得点と学習年数との相関性を表す回帰直線、および、問題 1 と問題 2 の合計得点と滞在歴との相関性を表す回帰直

線において、回帰直線から大きく外れている回答者の意識調査の結果を調べたところ、以下のことが明らかとなったからである。

- 同じ5年以上の学習歴で、獲得点数が4点しかなかった回答者番号2は、満点7点を取った回答者番号5、10と比較すると、文体意識に関する質問に対し、2番の回答者は「そこそこ意識している」と回答しているが、5番と10番回答者は「非常に意識している」と回答している。
- 日本語の学習年数が2年以上3年未満でありながら、獲得点数が6点であった回答者番号4は、レポートや論文に関する意識調査の問1、問3、問4、問5、問9のいずれも「はい」を選択した。文体のふさわしさと学習方法については「そこそこ意識している」、「大学の授業で学習、友人や周りの日本人から教わる、独学で学ぶ、ネットで調べる」と回答していた。他の2年以上3年未満の回答者5名の回答は様々であった。
- 日本語の学習年数が1年以上2年未満しかなかったが、獲得点数は5点であった回答者番号7は、意識調査の問4、問5について「はい」を選択し、文体のふさわしさと学習方法については「そこそこ意識している」、「インターネットで検索する」と回答していた。他の1年以上2年未満の回答者二人は文体のふさわしさと学習方法について、それぞれ「まったく意識していない」「あまり意識していない」と回答していた。
- 日本語の学習年数が1年未満であったが、獲得点数が4点であった回答者番号17は、意識調査の問1、問3、問4、問5について、「はい」を選択し、文体のふさわしさと学習方法については「そこそこ意識している」、「独学で学ぶ」と答えていた。なお、学習年数が1年未満の学習者この学習者のみであった。
- 日本の滞在歴が1年以上2年未満しかなかったが、獲得点数が7点であった回答者番号10は、レポートや論文に関する意識調査の問1、問3、問4、問5、問9のいずれも「はい」を選択した。文体のふさわしさと学習方法については「非常に意識している」、「大学の授業で学習、独学で学ぶ、他人の論文や関連書籍を読む」と答えていた。他の1年以上2年未満の回答者一人は文体のふさわしさと学習方法について「まったく意識していない」と回答していた。

この結果から、日本語学習者の学習時間と日本の滞在歴以外にも、文体的意味の理解に対する日本語学習者の意識も文体的意味の理解度にある程度の影響を及ぼしている可能性が示唆される。

6.3.4では、問題4で7点と6点の高得点を得た回答者番号1、4、5、22の4名が問題1と問題2の合計得点においても高い点数を得ていたことを示した。こ

の 4 名の回答者について分析してみると、回答者番号 22 以外の 3 名は日本語の学習歴と日本の滞在歴のどちらかが 5 年以上であった。また、意識調査の自己意識で判断できる問 3、問 6、問 9 については、4 名とも課題を提出する前にもう一度確認し、レポートや論文の文体について学ぶ授業や課外講座を受けたことがある。文章の目的や文章を読む人にふさわしい表現についても意識をしていると回答していた。

このことから、語の文体的意味の理解においては、受動的な学習だけではなく、主体的、自発的な学習も大事であることが示唆される。

## 7.5 文体に合わせた語の選択能力を上げるために必要なこと

7.4 で文体的意味の理解度に影響を及ぼす要因を考察した。まとめると、以下の 3 点である。

1. 継続的な学習時間
2. 日常的に日本語に触れることのできる言語環境、使用機会
3. 自発的な学習態度

まず、1 についていえば、特別な方法ではなく、絶えず日本語を学習し、学習が積み重なり、総合的な日本語の能力が上がると共に、自然に文体に合わせた語の選択能力も上がっていく。

次に、2 についていえば、積極的に日常的に日本語に触れることのできる言語環境と日本語を使用する機会を作ることが重要である。多くの日本語学習者が母国の人とのコミュニケーション圏内で活動する。必要な場面以外に、日本人との交流が少ない。方法としては、積極的に日本人と共に行う活動に参加し、話し方を気にしながら、様々な人と交流することが重要である。

最後に、3 についていえば、自ら独学することが大事である。実際の方法については、意識調査をした結果を見ると、インターネットの利用や関連論文、書籍を読むような方法があった。

## 第8章 終わりに

本研究では、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けられるようになるためには、何が必要とされるのかを具体化することを目的とした。そのために以下の三つをリサーチクエスションとして研究を行った。

1. 日本の大学や大学院で学ぶ留学生が文体的意味の習得の観点からレポートや論文中で間違いやすいのはどのような語か。日本の大学や大学院で学ぶ留学生は、レポートや論文に適した語の選択に関してどの程度意識しているか。
2. 日頃からレポートや論文に適した語の選択をこころがけている学習者は、特にどのような方法でその知識を得ようとしているのか。
3. 文体的意味の理解度が高い学習者と文体的意味の理解度が低い学習者の相違には、どのような要因が関係しているのか。

第2章では、本研究と関わる先行研究について見てきた。2.1では、『国語学大辞典』、魏（2001）、宮島（1997）の文体的意味についての分類を示した。また、2.2では、文体的意味の指導を行う上での課題について研究した、井上（2009）、高野（2011）を取り上げた。

第3章では、本研究における文体的意味の定義と研究方法について述べた。本研究では、以下に述べる三つの調査を行った。

一つ目は、予備調査として行ったものであり、本学の図書館にある留学生向けに書かれた文章の書き方についてのテキストの中から文体に関して留学生が間違いやすい語を抜き出した。これらの語は留学生を対象にした文体的意味に関する理解度テストを作成する際に参考にした。

二つ目も、予備調査として行ったものであり、「日本語学習者作文コーパス」中に見られる文体的意味とかかわる誤用を抽出し、誤用の傾向を分析した。

三つ目は、本調査として行ったものであり、1と2のリサーチクエスションを明らかにするために、大学や大学院の日本語学習者にアンケート調査を行った。

第4章では、調査1の結果を示した。調査1の結果、4冊すべてにおいて、以下の四つが日本語学習者の間違いやすい表現として取り上げられていた。

- 接続詞「だから、ですから」→「そのため/そこで/したがって」
- 接続詞「でも、だけど」→「しかし/だが」
- 縮約形「じゃ」→「では」

- 縮約形「V てる」→「V ている」

また、3冊において、以下の三つが取り上げられていた。

- 動詞（V）の連用形接続「V て、…」→「V（ます形）、…」
- 動詞（V）の連用形接続「V なくて/V ないで…」→「V ず/V ずに…」
- 縮約形「とく」→「ておく」

第5章では、調査2の結果を示した。調査2の結果、中上級中国人日本語学習者の誤用で最も多いのは「文末に丁寧体を使用している」や「モーラの脱落」が生じている助動詞で、誤用数全体の約半分を占めていた。次に多かったのは「いっぱい」のような副詞と「けど」のような接続助詞である。コーパスに出てきた語は、ほぼ調査1でテキストから抽出された語と重複していた。

第6章では、調査3の結果を示した。まず、テスト形式のアンケートの問題1については、主にレポートや論文で使用される副詞に関するテストであり、満点を取った回答者は全回答者の約57%を占めており、全体的に正答率が高かった。次に、問題2については、レポートや論文で使用される引用文に関するテストであり、満点を取った回答者は7名で、全回答者の30%に過ぎず、0点を取った回答者が11名と最も多く全回答者の46%であった。次に、問題3については、Eメール中の語の選択に関するテストであり、回答者数が一番多かった得点は3点で、7名であった。次に多かったのは5点を取った回答者で、5名であった。次いで、順に4点と7点を取った回答者が2名、2点、6点、8点、12点を取った回答者が各1名と続く。最後に問題4については、論文で使わない方がよい表現を選択し、論文にふさわしい表現に直すものであり、最も修正が多かったのは②の「書きますよ」であり、次いで多かったのは④の「違うんだなあ」と⑤の「じゃ」であった。また最も修正が少なかったのは、⑫「大学に入ってから」であり、次いで、⑥の「とか」、⑨の「から」と続く。

第7章では、第4章から第6章までに示した調査結果に対して考察を行った。

まず、「レポートや論文中で間違いやすい語」については、日常生活の会話の中で頻繁に使われる語や話し言葉が文章を書く際に間違いやすいものと考えられた。また、中でも、文末に普通体を用いるべきところに丁寧体を使用している誤用が多いことが明らかとなった。さらに、調査3の結果でも、同様のことが認められた。学習者の誤用の原因としては、二つ考えられた。一つは、日本語学習者が日本語の「書く」技能を練習する際に、改まった表現を必要しない作文を書くことから始まり、一般的な作文で使用する文体に慣れてしまっていることである。もう一つ、レポートや論文に適した表現を学習する機会があまり多くないことである。

次に、「レポートや論文に適した語の選択」については、日本語学習者がレポー

トや論文に適した語の選択に対して一定の意識を持っていることが分かった。

次に、「どのような方法で文体的意味を獲得しようとしているか」については、文体的意味の学習については、教育機関での学びに依存する人が多いことが分かった。そのほかの方法については、補足的な役割を担っている。

次に、「文体的意味の理解度に影響を及ぼす要因」については、以下の 3 点が挙げられた。

1. 継続的な学習時間
2. 日常的に日本語に触れることのできる言語環境、使用機会
3. 自発的な学習態度

最後に、「文体に合わせた語の選択能力を上げるために必要なこと」については、まず、1 の「継続的な学習時間」についていえば、特別な方法ではなく、絶えず日本語を学習し、学習が積み重なり、総合的な日本語の能力が上がると共に、自然に文体に合わせた語の選択能力も上がっていくといえる。また、2 の「日常的に日本語に触れることのできる言語環境、使用機会」についていえば、積極的に日常的に日本語に触れることのできる言語環境と日本語を使用する機会を作ることが重要であるといえる。さらに、3 の「自発的な学習態度」についていえば、自ら独学することが大事であるといえる。

以上の考察をまとめると、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けられるようになるためには、継続的な学習により総合的な日本語能力を向上させるとともに、日常的に日本語に触れられる言語環境や使用機会を確保すること、自発的な学習態度が必要であるといえる。

以上、本稿では、日本の大学や大学院で学ぶ留学生が、レポートや論文で使用する語とその他の種類の文章で使用する語を適切に使い分けられるようになるためには、何が必要とされるのかについて調査に基づく考察を行った。

しかし、今回の研究では、主に中国人日本語学習者に対する調査結果に基づくものとなったため、他の母語の日本語学習者についても同様のことが当てはまるかさらに調査する必要がある。また、レポートや論文以外の種類の文章で用いられる語の文体的意味の理解度については、明らかにすることができなかった。今後はこれらの点を研究課題としたい。

## 参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編(2015)『改訂版 大学・大学院留学生の日本語 ④論文作成編』アルク、12-13
- 石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク、76-79
- 井上次夫(2009)「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』(141)、57-67
- 魏育隣(2001)「日本語教育のための文体分類及び文体論指導の理論的認識について」『神戸女学院大学論集』48(1)、99-109
- 國廣哲彌(1995)『意味論の方法』大修館書店
- 国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版
- 高野愛子(2011)「レポート・論文の文体に関する学習者の認識-許容範囲を探るために-」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(37)、77-78
- 二通信子・佐藤不二子(2000)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク、8-9
- 日本語教育学会編(2005)『新版 日本語教育辞典』大修館書店
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、5-8
- 三牧陽子(2007)「文体差と日本語教育」『日本語教育』(134)、58-67
- 宮島達夫(1977)「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院、871-903
- 築晶子・大木理恵・小松由佳(2005)『日本語 Eメールの書き方』Japan Times
- Leech, G. (1974) *Semantics* London:Penguin. 『現代意味論』(安藤貞雄・澤田治美・田中実・樋口昌幸訳、研究社、1977)



## 参考 web サイト

- 「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」 科研グループ「日本語学習者作文コーパス」 <http://sakubun.jpn.org> 最終閲覧日 2021.6.15
- 株式会社 futurelabo「インターンシップガイド」  
<https://internshipguide.jp/columns/view/scholarship-application-reason> 最終閲覧日 2021.7.19
- 合同会社アイプレス・ポート格式会社「賢者の就活」  
<https://kenjasyukatsu.com/archives/1237> 最終閲覧日 2021.7.23
- OneCareer 就活サイト「ONE CAREER」  
<https://www.onecareer.jp/articles/526> 最終閲覧日 2021.7.23